

《書 評\*》

宮本久雄 著

『パウロの神秘論 他者との相生の地平をひらく』

東京大学出版会 2019年

Book Review Tolle, lege

田尻 真理子

Tolle, lege

「とって、読め (Tolle, lege)」に代表されるように、偉大なキリスト者の回心は、書物が関わる場合が多い。

かつて善悪二元論のマニ教を信じ、「罪のサルタゴ」に身をやつていたアウグスティヌスは後年、過去の自分とのままならぬ決別に懊悩していた際に聞こえてきた「とって、読め (Tolle, lege)」ということどもの声に従い、置いてあった「ローマ人への手紙13・13、14」を読む。これがアウグスティヌスの完全な回心の契機となる。

あるいは、ユダヤ教を放棄した無神論者で新進気鋭の現象学の徒であったエディット・シュタインのカトリック改宗には、ゲッティンゲンの現象学派サークルの一人、ヘドウィヒ・コンラッド＝マルティウス宅の書架にあった、アピラの聖テレサの自伝を手にしたことも一契機となっている。

また、著者が教鞭をとられる東京純心大学の創立者Sr. 江角ヤスは、東北帝国大学理学部在学中、トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』、加古義一編、ピリヨン閲、『日本聖人鮮血遺書』、マトン著、『ルルドの姫君』、この三冊の書物によって「ぐいぐいとキ

リスト教に引き込まれていった」と回想している。

書評子には、回心の契機に書物があることが長らく疑問の種であったが、『パウロの神秘論』によってこの謎がたちまち（本著に従えば「突如」p.53）氷解した。書物の文字、書かれている内容によって回心したのではないのだ。書物を読む行為のうちに pneuma が働いているのだ（pneuma の働きについてはとくに、p.62ff, p.290, p.300, p.302, p.406, p.412f, p.434）。気づいてみると深遠ではあるが、拍子抜けするほど恐ろしく単純明快なことがらで、まさしくすとんと「腑」に落ちた。

本著は、この pneuma の働きによって、現代の根源悪が招来する危機を超克し、他者との相生の途を拓くよう我々を促す。本著クライマックスともいべき、「根源悪の現象超克」と「他者との相生」を具体的に説く末尾の「むすびとひらき」に向けて、詳細な聖書釈義の先行研究及びこれに対する筆者の見解が怒涛の如く展開される。この精緻な「水も漏らさぬ」聖書解釈の提示は、全体主義の超克と他者との相生の思想「エヒエロギア」の可能根拠となるパウロの神秘論を盤石なものとしていよう。なお、「エヒエ」(旧約ヘブライの動詞「ハーヤー」の未完一人称、「われはそれなり」、「わたしはある」)は、相生のために他者へ向けて自己を超出する動態を意味する。キリストの受肉もこの自己超出にほかならない。

さて、本著が「神秘主義」ではなく「神秘論」であることに注目しよう。たとえば、「還<sup>エピストロペー</sup>帰」によって精神が「一<sup>ヌース</sup>者」と合一する「脱<sup>エクスタス</sup>我」というプロティヌスの神秘主義から(図1)、質料的な身体(ソーマ)は悪しきものとして駆逐されている。このヘレニズム的な形相重視質料蔑視の霊肉二元論(「ソーマはセーマ」!!)やグノーシス主義とは異なり、パウロの神秘論の中心はソーマの変容、すなわち、キリストと共なる受苦によりキリストのソーマとの同形化し、

神のエイコーンに与ることである。実際、ロマ書八章に列挙される「災いか、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か」(ロマ、8-35)の「危機のカatalog」がパウロ自身のソーマ体験の背後にあることを筆者は示唆している。そこでパウロは「身(ソーマ)を張って生きた」のである。

この「危機のカatalog」から察せられるように、パウロは終末的危機意識を生き、終末的切迫感のうちに異教的偶像崇拜や教条的立法主義が跋扈する黙示録的危機を語るとともに、人と神、人と人、人と世界の「<sup>あかい</sup>間」をずたずたにする罪の贖い、神の救いのプランという神秘を説いた。パウロの危機意識とも重なる、根源悪が様々な形で現象する危機の時代の閉塞と危機を突破しうる鍵としてイエス・キリストの神秘を示したからこそ、パウロの神秘論がアクチュアリティを持つのである。

ではなぜ、パウロが相生の可能性に繋がるのか。所謂「ダマスコ体験」において、キリスト教徒迫害のためにダマスコに向かう途上、熱心で過激なファリサイ派(律法主義)のユダヤ教徒、サウロ(パウロ)に強烈な光として復活した栄光のキリストが顕現し(図2)、サウロは回心する。同時に異邦人の宣教の召命を受ける。例えば異教徒とは食卓を共にしないなど、当時のユダヤ教は律法を盾に他民族を排除していたが、「他」なる異邦人への宣教の使徒となることはこうした自閉性を破ることにほかならない。パウロこそ、「異邦人もユダヤ人も、自由人も奴隷も、男と女もみな一致して相生できるメッセージを伝え」(p.458)、イエス・キリストにより「人間の他者性・アガペー(愛)という普遍的地平」(p.64)を開示され、 pneumaの働きで相生の協働体を形作っていったのである。

本書では随所で、キリストの受難に与ることの重要性が説かれている。先にあげたSr.江角の掲げる学園標語、「マリアさま、いやな

ことは私がよろこんで」は、もっとも日常的な位相での受苦への招きであろう。まずは、自己を超えて他者のために「骨を折」ろう（骨折は痛いし辛いし苦しい）。

最後に。あたかもこれまでの人間の傲慢ヒュプリスに下す鉄槌のような昨今の異常気象、巨大地震と津波、そして新型コロナウイルス感染症をとどめとして、我々は「水に流す」風土に由来する忘却——アウシュヴィッツの、ヒロシマ・ナガサキの、オウム真理教の、3.11-フクシマの——を覆し、来し方への内省を迫られている。隘路に投げ込まれたかのような内省を。

本著は、そのいかんともしがたい閉塞感の彼方に一条の光を示す希望の書である。本著に多くの読者が与り、プネウマの働きにより相生の道を共にすることをつとに望む。

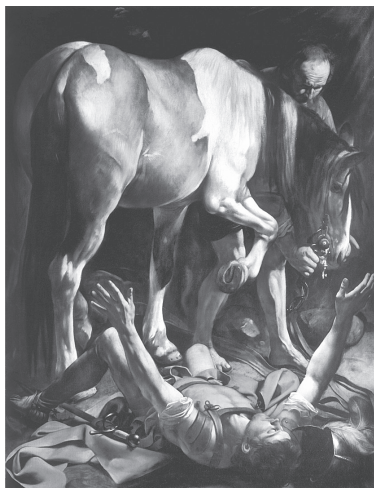
Tolle, lege.

\*宮本神父様がこのたび書評の機会を与えてくださったことを心より感謝申し上げます。



図(1) ウィリアム・ブレイク <<時間と空間の海>>

左上に描かれた「一者」の国から、プロ・ホドス（流出）の流れに乗って人はこの世に生れ落ちる。右上洞窟中の壺は子宮（Womb is tomb）を表す。水に浸かった女性は「純粹質料」にまみれた死んだ魂である。中央の遍歴の人、オデュッセウスは、女神アテーナによって「一者」の世界に回帰するよう促されている。（キャスリーン・レイン、『ブレイクと古代』）



図(2) カラヴァッジョ、<<聖パウロの回心>>

歴史的大事件に気付かぬ馬丁は、馬の世話に余念がない。  
 （ジョルジョ・ボンサンティ、『イタリア・ルネサンスの巨匠たち29 カラヴァッジョ』）